

心が元気になる、5つの部活ストーリー

# 青春サプリ。

夢をあきらめない

田中夕子・日比野恭三・オザワ部長・青木美帆 文  
くじょう 絵

# Contents

— 目次 —

## STORY 1

- 005 あきらめなければ夢は叶う  
清風高等学校 バレーボール部
- 007 俺にとつての奇跡  
絶対バレーボール選手になる
- 009 一番バレーがうまいヤツ
- 018 同じ場所にはいられなくても  
大阪予選、準決勝として決勝
- 026 3度目の春高、最高の舞台へ

## STORY 2

- 039 神風、吹く。  
聖ウルスラ学院英智高等学校 バドミントン部
- 043 目立たない存在
- 046 監督の期待
- 049 それぞれの決意
- 053 仲間の思い
- 056 静かな闘志
- 058 超ポジティブ
- 061 八島、降臨
- 063 確かな自信
- 066 頂点に立つ
- 069 大きな学び

## STORY 3

- 071 見えない悩み  
東京都立千早高等学校 演劇部
- 073 水蓮の憂鬱

## STORY 4

- 079 劇をつくりたい
- 082 見えない女子の悩み
- 085 幸乃と水蓮
- 088 オシブチユウコ
- 091 大会当日のハプニング
- 094 高い評価
- 098 舞台裏の涙
- 103 恋する五・七・五  
愛媛県立今治西高等学校 俳句部
- 105 大阪から決意の「俳句留学」
- 112 このままやと出場できへん！
- 115 急造チームで全国大会へ！
- 120 真夏のアーケード街での対決
- 132 叶った夢、破れた夢
- 138 空へ手を真っ直ぐ！

## STORY 5

- 141 気球から見える景色  
北海道土幌高等学校 熱気球部
- 143 熱気球部に入らないか？
- 147 こんな気持ちになれるのか
- 154 バイロットになれるら
- 159 地獄のフライトトレーニング
- 165 心に余裕を持つこと
- 168 風をつかまえる
- 173 これからもずっと

STORY. 1

あきらめなければ夢は叶う

この本に収録されているストーリーは、  
すべて実話です。

清風高等学校 バレーボール部

大阪府大阪市

← 古藤宏規（ヒロキ）— Kaito Hiroki  
バレーボール部キャプテン。  
センス抜群だが難病を抱える。



→ 山口誠 — Yamaguchi Makoto  
バレーボール部の監督。ヒロキを信頼している。



⑦ 西川馨太郎（ケイトロウ）— Nishikawa Keitaro  
バレーボール部で一番の長身。  
ヒロキの同期。



俺にとっての奇跡

大人でも泣くんや。

一瞬、そんなことを考えたけれど、大人だけじゃない。俺も泣いていた。まだこれが最後じゃない。全国大会が決まって、大変なのはこれからだとわかってはいたけれど、一度爆発した「うれしさ」と涙が止まらない。

2018年、11月4日。春高バレー大阪府代表決定戦男子決勝。大阪は2校が代表に選ばれる。準決勝で常翔学園に勝った時、俺たち、清風高校は春高の出場を決めた。決勝があるとはいえ、代表はすでに決まっているのだから、泣くほど喜ぶことなんてないだろう。ふつうだったら、そう思われるやろうな。

でも、俺にとってこの試合は特別だった。

試合に出ることはなく、ベンチに座って祈り続けて、応援することしかできなかったけれど、この場所にたどり着けたことが、俺にとっては奇跡だった。

春高  
全日本バレーボール高等  
学校選手権大会の通  
称。春の高校バレー。  
毎年1月に開催。それ  
までに都道府県大会が  
行われ、各地域の代表  
が決まる。

2年の時もこの夏も、ずっと勝てなかった大塚高校に2対0で勝利して、2年ぶりの大阪大会優勝が決まった瞬間、俺、ヒロキ（古藤宏規）は男子バレー部顧問で監督の山口誠先生と抱き合って、喜びを分かち合った。

俺も泣いていたけど、たぶん、先生のほうが泣いていたよな。

勝ってうれしかったからだけじゃない。

どれだけ大好きでも、バレーボールをあきらめなきゃならないと思った時、「清風と一緒にやらないか」と声をかけてくれた山口先生。

苦しい時間や、先が見えなかったころのこと。「努力をしない人間は、どれだけバレーがうまくても試合には出さない」という山口先生のもとで、めちやくちゃ練習したこと。そのすべてが、この日、この瞬間につながったんだ。

あきらめなくてよかった。うれし涙って、最高やな。

## 絶対バレーボール選手になる

小学3年生のころから始めたバレーボールに、ヒロキはずっと夢中だった。

身長が大きいほうではなかったけれど、最初はバリバリのアタッカー。4年生の時に一度セッターをやった時は、周りがなかなか点を取ってくれず、自分でツーアタックばかりしていて怒られたこともある。とにかく負けず嫌いで、デカイ相手の上からスパイクを決めた時は最高だった。

小学生で全国大会にも出場し、ベスト16まで勝ち進んだ。将来の夢はもちろんバレーボール選手。憧れは当時日本代表でも活躍していた福澤達哉さん。「俺も福澤さんのように打ちたい！」と何度も何度も映像を見返して、ジャンプの仕方やスパイクフォーム、膝の曲げ方まで徹底的に真似をした。当時の日本代表選手の中でも、ジャンプ力がすごかった福澤さんのように跳びたくて、毎朝学校へ行く前に必ず15分、なわとびをするのもヒロキの日課だった。

**アタッカー**  
攻撃で、ボールを打ち込む役目。

**セッター**  
スパイクをする選手にトス（相手）が打ちやすいような球を上げる役割。

**ツーアタック**  
セッターが、トスを上げると見せかけて、スパイクなどで攻撃すること。

**スパイク**  
味方が上げたボールを、ジャンプして相手コートに強く打ち込むこと。

中学も当然バレーボール部に入り、一年からレギュラーとして試合に出場した。経験者が少ないチームで、自分がエースとして引っぱったる、と思っていた。

だから突然、身体に異変が生じた時は、すべてが嘘みただった。

中学一年の10月、テスト期間で部活の練習もなく、学校を終えたヒロキは近所に住むおばあちゃんの家にいた。仕事を終えた母が、ヒロキの顔を見て言った。

「ヒロキ、あんたどこでケンカしてきたん？ 顔はれとる。目もパンパンやで」

「いやいや、誰がテスト期間にケンカすんねん」

でも、そういえば最近疲れやすいし、やたら眠たい。食っちゃ寝、食っちゃ寝の生活で、なんとなく身体も重たいし、オシッコも出ていない。

「ネフローゼちやうか？」

母の知り合いで同じ病気を患った人がいて、ヒロキの症状と重なっていた。近くの病院へ行くと「すぐに大学病院で診てもらったほうがいい」と言われた。何の病気かと不安に思いながらも、翌朝起きて鏡を見たら顔だけじゃなく頭までむくんで、海の中のワカメみたいな形に変形していた。ふつうじゃないことは、さすがのヒロ

ネフローゼ  
ネフローゼ症候群。  
たんばく質が尿から出  
てしまうため、血液  
中のたんばく質が減  
って体がむくむ病気。

キにもわかった。大きな大学病院へ行くと、その場で言われた。

「ネフローゼ症候群やね。長期入院して、治療しましょう」

子どものころからケガをしたこともないし、病気の経験もない。ヒロキにとって病院は無縁の場所だった。それが突然、長期入院することになった。学校にも通えないし、入院中は羽曳野支援学級という院内学級で勉強しなければならぬ。

バレーボールどころか、院内学級の時間以外は絶対安静。尿の中に大量のたんばく質が排出されてしまうネフローゼ症候群は、食事制限も厳しく、入院中の食事は塩分ゼロ、水分も一日700ミリリットル以内に抑えなければいけない。食事の量も味も制限されるうえ、薬の副作用で常に空腹状態が続く。ただでさえ少ない食事を2回や3回に分けて食べるのは本当にきつかった。

毎日体育館でボールを追いかけていたのに、今は毎日ベッドの上において、食べるものも食べられない。

(バレーボール選手になる夢なんて終わった。これから先、俺の人生はどうなるんやろう)

院内学級  
長期入院している児童  
や生徒が治療を受け  
ながら学べるように、  
病院内に設けられた学  
級。

ヒロキは毎日そんなことばかり考えた。

そんなつらさを消してくれたのは、同じ院内学級で顔を合わせるヒロキよりもずっと小さな子どもたちの存在だ。年上のヒロキは、子どもたちの人気者だった。

看護師さんからも「ヒロキ、今日新しく男の子が入院してくるからよろしくな」「ごめんやけど、お風呂一緒に入れてあげて」と頼まれるほどだった。ヒロキも子どもが好きだったから、頼ってくれるのはうれしいし、何よりかわいい。

でも、楽しいばかりでなく、厳しい現実もある。

2か月経って退院が近づいたころ、ヒロキはシヨウくんという男の子と友だちになった。3歳か4歳になったばかりのシヨウくんはカルタが大好きで、何度も勝負した。最初はわざと負けてあげていたのに、シヨウくんはどんどん強くなって、途中からは本気で勝てなくなった。うれしそうに笑いながら、シヨウくんは言った。

「ヒロキくん、僕、今度外泊許可が出たらデイズニerland行くねん。ヒロキくんにもお土産、買って来たるな」

シヨウくんの外泊許可が出る前に、ヒロキは退院した。それから少し経って、外

来で病院へ行った時、ヒロキはシヨウくんを訪ねた。でも、シヨウくんはいない。転院したのかと思って尋ねると、看護師さんが言った。

「シヨウくん、亡くなったよ。デイズニerland、行けへんかった」

シヨウくんは小児がんで、大人になるまで生きることができなかった。

退院したヒロキは、またバレーボール部の練習に参加するようになった。

筋力も体力も落ちて毎日がしんどかった。朝昼晩、食事のたび10錠近い薬を飲み続けなければならない。再発したらまた長期入院して、バレーボールから離れなければならない。そんな生活が嫌で、体調が悪くても黙っていることもあった。

だけど、ヒロキは心に決めていた。

どれだけ願っても、やりたいことができずにいる子たちがいる。自分は、たとえ病気で医者に言われたことを守って治療を続けられれば、好きなバレーが続けられる。だったら、やるしかない。負けたらあかんやる。

俺は絶対バレーボール選手になる。もっともっと強くなる。

小児がん  
15歳未満の子どものがかかる、がんの総称。

## 一番バレーがうまいヤツ

中学3年になった時、ヒロキは大阪の名門、清風高校から「うちでやってみないか」と声をかけてもらった。迷う理由なんてなかった。

ヒロキが清風の水色と白のユニフォームを初めて見たのは、バレーボールを始めた小学生のころだ。

「清風カップ」という小学生の大会が開催されて、そこにヒロキも参加した。たまにたまヒロキがいたクラブの監督の息子さんが清風高校のバレーボール部だったことあっても、春高の代表決定戦を応援しに行ったこともあるし、小学生の大会でもサポートしてくれる高校生の姿は憧れで、何よりあのユニフォームがかっこよかった。監督の山口先生も元バレーボール選手で、日本トップのVリーグ、東レアローズに在籍して、日本代表のセッターとしても活躍したバリバリの人だ。ヒロキの病気もわかったうえで「真剣にバレーボールをしたいなら清風に来ないか」と言ってくる

れた時は、めっちゃくちゃうれしかった。

同級生にはどんな選手が集まるんだろう、とワクワクしすぎていたせいか、実際に集まったメンバーを見たら驚いた。7人の同級生の中に一人、190cmを超えたデカイヤツがいるけれどバレーはたいしてうまくない。あとはそれほど大きくないどころか、中学時代は野球部、陸上部だった、というヤツもいる。2人1組でパス練習をしても、正面に打ったボールをレシーブでとんでもない方向にはじくのも当たり前。スパイク練習もネットにかかってばかりで進まないで先輩から「迷惑だから打つな」と言われることも日常茶飯事だった。

嘘やろ。これ、俺ががんばって引っぱらないと勝てへん。

「お前らの代はスカウトで声をかけた選手に軒並み断られた。ドラフトで言うたら1巡目やなくて、3巡目の代や」

後になって、山口先生からそう冗談まじりで言われたのも納得だった。

でも、ヒロキより先に1年生でレギュラーに選ばれたのは、ヘタクソなデカイヤツ、ケイタロウ（西川馨太郎）だった。ヒロキもベンチ入りできる14名には入って

Vリーグ  
バレーボールの日本国内最高峰リーグ。

レシーブ  
サーブやアタックなど、相手の攻撃してきたボールを受けること。

ドラフト  
ドラフト制。プロスポーツリーグで、新人選手を獲得するための交渉権を、抽選で決める制度。



いたけれど、12名しか登録できないインターハイ直前に外れた。しかもそのインターハイでは、先輩たちが活躍して準優勝した。

チームが勝つのはうれしいけれど、メダルをもらえるのはベンチ入りの選手だけ。悔しくて、試合に出たくて、ヒロキはとにかく練習した。特に高校からリベロにポジションが変わったこともあり、それまで以上にレシーブ練習は一生懸命したし、ゲーム形式の練習になれば自分が拾うだけじゃなく、「俺がここまで拾うから、ブロックはここに跳んでほしい」と具体的な指示も出した。

ヒロキにとってはすべて当たり前のことだったけれど、ケイタロウはあれこれ言われながら、こんなふうに思っていた。

(ヒロキがいると、コートの中に監督がいるみたいや)

小学生のころから全国大会に出場したヒロキに対し、ケイタロウがバレーボールを始めたのは中学に入ってから。運動能力は高いけれど、器用じゃない。そんなケイタロウから見ると、ヒロキは、今まで出会った中で一番バレーがうまいヤツで、試合中にかげられる声や、相手を見て次はどうなるか、どう動けばいいかという判

断力もピカイチ。何げなくボールをつないでいるように見えるが、守備位置もレシーブ技術も抜群。周りについていくのが精いっぱいだったケイタロウとは違い、ヒロキはいつも自信满满で、調子が悪いところなんて見たことがなかった。

だから一年生の春、リリーフサーバーとして高校の公式戦に初出場したヒロキのフローターサーブが、まるでホームランのように相手コートのはるか後ろまで飛んでいき、大きくアウトになった時、ケイタロウは心底驚いた。ヒロキにとっては「そんなもん忘れた」というシーンだけれど、「ヒロキもこんなミスをするんや」と、ケイタロウの記憶に今もはっきりと刻まれている。

それぐらい、ヒロキはミスが少なく、何より「ヒロキについていけば間違いない」と思わせる力を持つ選手だった。

インターハイ  
全国高等学校総合体育  
大会。毎年7月から8  
月に開催される。高校  
のスポーツ大会。

リベロ  
レシーブなど、守備専  
門の選手。

ブロック  
守備で、スパイクを防  
ぐこと。

リリーフサーバー  
流れを変えるなどの目  
的で、試合の途中で  
交代してサーブを打つ  
選手。

フローターサーブ  
顔の前にトスを上げて、  
押し出すように打って  
打つサーブ。ボールが  
回転せず、急激に落  
ちるなどの変化をする。



心が元気になる、5つの部活ストーリー

## 青春サプリ。

——夢をあきらめない

2023年2月 第1刷

文：田中夕子・日比野恭三・オザワ部長・青木美帆

絵：くじょう

発行者：千葉 均

編集：笹屋洋子・崎山貴弘

発行所：株式会社ポプラ社

〒102-8519 東京都千代田区麹町4-2-6

ホームページ：www.poplar.co.jp(ポプラ社)

印刷・製本：中央精版印刷株式会社

装丁・本文デザイン：ナオイデザイン室

Text Copyright ©Yuko Tanaka, Kyozo Hibino,

Ozawa Bucho, Miho Aoki 2023

Illustrations Copyright ©Kujo 2023

ISBN978-4-591-17701-3

N.D.C.916/175P/19cm

Printed in Japan

- 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。  
電話(0120-666-553)、またはホームページ(www.poplar.co.jp)の  
お問い合わせ一覧よりご連絡ください。  
※電話の受付時間は月～全曜日、10:00～17:00です(祝日・休日をのぞく)。
- みなさんのおたよりをお待ちしております。  
おたよりは編集部から著者へおわたしいたします。  
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は  
著作権法上での例外を除き禁じられています。  
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、  
たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。